備陽史探訪
第63号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

歴史の楽しみ

会長　田口　義之

私が歴史に関心を持つようになって今年で二五年になる。それはある本との出会いに始まった。中学校の図書室で村上正名先生の『備後物語』を手にしたのがそもそものきっかけであった。以前から歴史に興味をもっていたのだが、それは男の子ならだれでも持つ、小学校の教科書にある「仁徳天皇陵」とか「織田信長」の挿絵に対する巨大なもの、英雄的な者に対する憧れであって、それ以上のものでも、それ以下のものでもなかった。むしろ当時の私は、天文とか自然科学などのように実際自分で観察できるものの方に関心があったのである。

ところが、村上先生の『備後物語』を読んで行くと、何と自分の住んでいる福山にも『古墳』や『貝塚』があるではないか。これは新鮮な驚きであった。今まで自分の手に届かない遠い存在とばかり考えていた古墳や貝塚が身近にある。それ以来私は学校の勉強はそっちのけで、『備後物語』に出て来る古墳や貝塚を自分の足で確かめる計画に熱中することになった。

その機会は以外に早くやって来た中学三年の六月、友人たちと駅家町の蛇円山に登ることになり、提案して帰り道に同町の「二子塚」を見学しようということになったのである。今でもよく覚えているが、梅雨空の中、蛇円山に登り、帰り道に服部大池の土手を右に渡って、地図上にある二子塚を目指したのである。しかし、いくら探してもそれらしいものは見当たらなかった。それもその筈である。地図には、古墳を示す∴印が誤って記入されていたのである。諦めて帰りかけた時、私は意を決して、道端で農作業をされていた老婆に、「この辺りに、二子塚という古墳はありませんか」と声をかけて見た。すると老婆は私達を物珍しそうに見て、「古墳ゆうたら〝塚〟のことき〃あのー。塚ならその向こうにあるど。福山からきたんきゃー。ハミにかまれんようにのー」…。

老婆に教えられて向こうの丘に登って見ると、あるではないか二子塚が。しかし、それは本で読んだものとは大分違っていた。本の挿図には見事な「前方後円墳」が描かれていたが実際登って見ると、確かに前方部と後円部の盛り上がりは分かるのだが雑木が茂っていて、その全貌は容易に頭の中で像を結ばないのである。

この書物と実物の違いは、私の好奇心を減退させるどころか、かえって燃え上がらせた。「よし、何でも自分の目で見、足で歩いてやろう」これが現在まで私を歴史の道に歩ませる大きな要因になったのである。

地域の歴史、郷土史の楽しみは、実はこの「自分の目で見」「自分の足で確かめる」ことにある。たとえ、仁徳天皇陵古墳まで時間にして三時間しかかからなくとも、気が向いた時に気楽に訪ねるという訳にはいかない。しかも歴史のインスピレーションは案外こうした〃何度も訪れる〃中で生まれて来るものなのだ。

歴史は受け身であってはならない。その中から何かを〃発見〃することに楽しみがあるのである。私の経験から言えば、身近には発見されることを待っている『歴史』が無数に転がっているのである。

わが備陽史探訪の会も、今年で発足以来一五年目を迎えることになる。確かに「歴史の発見」という観点からは我々も地域史の解明の上でなにがしかの役割を果たして来たと思う。備南で初めての前方後方墳も発見したし、中世史のある部分も我々の活動で明らかにされたものも多い。しかし、会の日常活動という観点からは〃まだまだこれから…〃と反省する点も多い。二〇〇名に達する会員の皆さんに「歴史の楽しみ」をどれほど味わってもらえただろうか。無数に歴史の発見があると豪語しながら、果たしてその楽しみを皆さんと共にどれだけ共有出来ただろうか。

一五年を迎える今日、私は会の今後の指針として、この「歴史の楽しみを皆さんと」、というスローガンに置きたいと思う。歴史の楽しみを少数の者の占有物にしてはならない。出来るだけ多くの皆さんに私達の輪に入っていただき、ともに歴史の発見に邁進して行きたいと思うのである。

憧れの白旗城に挑戦する

ー赤松氏の史跡巡りへのお誘いー

杉原　道彦

『山城探訪』の原稿の締切り日を思いつつ、新年を迎えることができました。今年のえとは、乙亥です。乙は、万物が軋々然（こすれあって音をたてる）と伸び出ること。亥は、核と同意で万物が次代の種になることと物の本に書いてありました。

『亥（猪）』にまつわる故事、諺として次のようなものがあります。

一龍一猪

「人間は子供の頃は皆同じようなもの。しかし、勉強するか、しないかによっと年と共に違ってくる」

遼東の豕

「井戸の中の蛙、自分だけが偉いと誤信している人間のこと」

猪突

「向こう見ずにつきあたる意。進むを知りて退く知らぬは猪武者」

猪口才

「小利口なもののこと」

猪狗もその余を食わず

「人を罵ることば」

商売、相場の格言として

戌亥で借りて辰巳で返せ

「不況で金利の安い時期に資金調達して投資を拡大し、好況になる五、六年後に稼いで借金を返済するのが商売の極意」

少しは参考になったでしょうか。

ところで、この度の阪神大震災で被災された方々には、心からお見舞い申し上げます。今から、七二年前の癸亥の年と言えば、大正一二年に発生した関東大震災が思い起こされます。死者九万人、行方不明四万人と記録されています。また、癸卯の年の天明三年は　浅間山が噴火し、天明の大飢饉の発生した年であり、七二年後の安政二年の乙卯の年に安政大地震が発生しています。

亥や卯の年に天災が目立つのも偶然ではないかも知れません。年表を見ながら感じております。

私事ですが、生命保険会社から誕生日に届いた今年一年の運勢によれば、発想が豊かになる年で、趣味や芸術面に力を入れるといい、とでています。よって、備探会のお役に立てるよう一生懸命頑張りますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

前説が長くなりましたが、本年度第一回の史跡巡りに皆様をご案内いたします。今回は、あの「憧れの白旗城に挑戦」していただきます。そうです。これは、備探会史上かつてないサバイバル例会なのです。

白旗城は兵庫県赤穂郡上郡町に所在します。城郭は標高四四〇メートルの急峻な白旗山頂にあり、総延長四七〇メートルの播磨国でもトップクラスの典型的な連郭式山城です。

上郡到着後、まず歴史民俗資料館を見学し、ジオラマを見ながら白旗城の予備知識を身につけていただきます。ただ、この建物は旧女学校の校舎をそのまま使ってるので空調設備がなく、三月中旬だとまだ少し寒いかも知れません。

しかし、ここから野桑登山口まではすぐ、バスで五分ほどです。

野桑から約三キロメートルをおよそ一時間半かけて登っていただきます。白旗城へ登るにはそれ相当の覚悟が必要です。当日は、体調を良く整えておいてください。また、行きの車中での飲酒はご遠慮願います。

『太平記』によれば、新田義貞が赤松氏討伐のため、白旗城を大軍で攻めても五十日持ちこたえた、といいます。皆様も新田軍になったつもりで白旗城を攻めていただきます。そうすれば、なるほど、これでは落ちぬわけだ、と実感できます。

頂上での一杯は、一生の思い出となることでしょう。

下山後は、赤松氏館跡、宝林寺の赤松円心像（県重文）も拝観する予定です。

『備後古城記を読む』

ー中世を読む会ー

毎回、約一五名の精鋭会員が参加する、備陽史探訪の会で最強の学習会です。

中世の備後の武将と山城に興味のある方はぜひご参加下さい。

＜実　施　要　項＞

日時　二月一八日（土）午後七時。
場所　中央公民館二F視聴覚室
座長　出内博都（城郭部会部会長）
テキスト代　千円（既購入者不要）
資料代　一〇〇円程度

徹底的に『古事記』を読む

歴民研主催の講座ー『古事記』を読むー第六回は伊耶那岐神、伊耶那美神を中心に学習します。

テキスト用意の関係上、初参加者は平田さん（〇八四九ー二三ー三七八一）までご連絡下さい。

＜実　施　要　項＞

日時　三月一一日（土）午後二時。
場所　中央公民館二F会議室
講師　神谷和孝（名誉会長）
　　平田恵彦（副部会長）
テキスト代　千円（既購入者不要）
資料代　一〇〇円程度

賢人は歴史を学ぶ

柿本　光明

むかしの古いアルバムを開いて写真を見るのは楽しい。生まれたばかりのはだかん坊の写真は、あかちゃけてほんとうに自分であるのか……。じっと見つめる父母のまなざしも慈愛に満ちてかがやいている。

当時は、自分で撮るのではなく写真屋さんが撮ってくれる。

誕生日ごとの写真は、年ごとに育ってきた自分の年輪である。立ち、歩き、話し、しかられ、泣き、笑って、健康に育ってきたおいたちの記録を、一枚一枚の写真は語っている。

年輪が六つ重なって、小学校へ入学したときの晴れがましい。わたくしの横には母の顔がうれしげにほほえんでいる。

小学校へ通うようになってからは運動会や遠足の楽しい思い出の数々が、いっしょに遊んだ友だちとともに、のこされている。

小学校へあがってからはカメラのすきな若い先生が、家では買ったカメラで父がよく写してくれた。ピンボケの写真も五・六枚はある。

アルバムにはられた一枚一枚の写真には、わが家の歴史がひめられている。兄や、姉、妹といっしょに撮ってもらった写真もあり、兄や姉、妹がわが家に来たときに、当時のこと、おいたちを語り合い、いっそう楽しく思われる。これまでの健康に成長してきた自分の記録も、そこにはのこされている。それをたどることによって、わたくしたちは、いまここに現在の自分があることをはっきり確かめることができるのである。

記憶を失った人のことを知っていますか。ドラマにはよくでてくる話ですが、なにかのひょうしに過去の記憶をなくし、現在の自分がだれだかわからなくなってしまって、これからどうなるのか、どうしたらよいのか、心のやみのなかをさまよい続けている人です。

ドラマでは、やがて記憶がよみがえって、自分を取りもどし、安心して再びもとの生活にもどることになるのですが、いまもし突然に自分がそうなったらどうでしょう。

過去がなくなったら、それに続く現在はありません。未来もやみにとざされてしまいます。わたくしたちが、現在強く生きていられるのは、歴史という過去の糸にいつもしっかりつながれているからである。

人は、それぞれに過去の糸につながれながら、未来に大きくのびあがろうとしている。

大空に高く枝葉をのばす大木が地に深く根を張るように、将来にのびようとするものは、それぞれに豊かな過去を持っている。

過去の歴史は、人にとって大きな財産である。それをたいせつに胸をいだいて持つものが、将来に大きくのびることができるのである。だが、過去はただそこにあるのではなく、自分で求めてつかんでゆかなければならないものである。

明治の初めに日本に来たアメリカ人のモースは、横浜から新橋へ来る途中の汽車の窓から大森の貝塚を発見して、大むかしの日本に縄文の土器をつくって生活していた新石器時代の過去があったことを知らせてくれた。

また一九四九（昭和二四）年九月二〇日の各新聞は、相沢忠洋青年が、群馬県の岩宿の道ばたで、いままでに見たことのないふしぎな石の破片を拾って、遠い過去の日本に、旧石器時代の生活があったこと発見したと大きくとりあげた。

「旧石器時代の遺物！桐生市近郊から発掘」

この新聞記事は考古学に興味のある人だけであく、多くの人々をおどろかせた。

飛鳥の高松塚古墳を発掘した人たちは、石の壁にえがかれたみごとな彩色の壁画を見つけ、日本と朝鮮との深いつながりを考えさせてくれました。

わたくしたちの祖先は、大きな遺産を歴史のなかにのこしてくれた。過去の歴史は祖先の歴史をひめた宝の庫（くら）である。遠いむかしの過去は、歴史のなかにうずもれて、人びとの記憶から失われやすいものだが、それでも、祖先ののこした歴史の宝庫は、いつまでも心ある子孫の手によって開かれるのを待っている。

歴史のなかにうずもれた祖先の遺産を豊かに受けついでゆくものが、現在を強く生き、未来に大きくのびることができ、歴史を知る楽しさと喜びがそこにあると思う。

賢人は歴史を学ぶ…という。わたくしたちのアルバムが生まれたばかりのはだかん坊の写真から始まるように、わたくしたちの祖先はどのように生活し、大和の朝廷はどのようにして日本をつくったか過去の日本の歴史をよく学び、なぞの歴史の宝庫にふみ入り知らなかったことを知る。歴史のなぞ解きは楽しいものである。

秋の北房路と古墳巡り

坂本　敏夫

バスツアーも今回で私も二回目、少しは皆さんとも顔なじみになり、気楽に参加しました。旧山陽道を歩く会に参加して当会を知り入会させて頂き、早いもので四ケ月になろうとしています。

昨年末、事務局より秋の北房路バスツアーの一文をと言われて、軽く引き受けたのは良いが生来の浅薄、不熟者にて何からどう書いて良いやら、巧くまとめることができるかな。

十一月二十日午前八時、一路秋深き北房路へといざ出発。岡山県北へは一昨年家族で津山に旅したのが初めてで今回が二度目かな、などと思いながら、うつらうつら良い心地。気がつくと早くも井原を過ぎ、備中川上町をバスは走る。車窓からは田圃の向こうに山々の紅葉が目に映り、山すそから中腹、尾根へとへばり付く様に点在する家々。何故あんなに高い所で不便だろうに。しかし昨日より今日、今日より明日、明日より明後日と一歩一歩地に足つけて刻んだ郷人の足跡を見る様だなぁ。

秋の備中路も歴史の営みを感じるな、なんて柄にも無く景色に見とれていると、バスは成羽から備中高梁へと走る。そう高梁と言えば城下町、古い家並みが残っている町、川魚料理も旨いと聞く。一度ゆっくりと来てみたいものなどと考えながら、網本副部会長の北房の古墳巡りについての説明を子守歌に好い気持ち。気がつくと、間もなくバスは大谷一号墳に着くとの案内。居眠りばかりしていたせいか意外と早く着いたな。

さて大谷一号墳は整備中と聞いたがどんな古墳かな。

おお…これは又凄い。石組みの立派さ、墳丘の版築、斜面を巧く使っての築造といい、今まで自分が考えていた古墳に対するイメージとは全く違う。最初の見学古墳がこれではこの後が楽しみだな。

と、この様な期待で始まった北房の古墳巡り。北房町故郷センターでの定古墳特別展、午後からの荒木山東塚・西塚、金モール出土の定一号墳、大谷一号墳と同じ切石積の定北古墳と期待通りの古墳群。

山間の地、北房の小さな谷間の郷に方墳、円墳、前方後円墳、切石積塚とバラエティーに富んだ古墳の数々。又出土遺物の多様さと特異性。吉備の中でも南部や備後と一味違う独自の文化を育んでいたとの思いを強くしたものです。

特に版築、切石積方式の古墳造り、又出土物では重厚な陶棺、素晴らしい金モール、見事な環頭太刀と云い、独自の文化とかなりの経済力を併せ持つ地域で在ったのではないだろうか。

それにしても今から千数百年も昔に今に伝わる版築技法を見事に使いこなしていたとは先人の知恵にただ脱帽するのみ。

往時の郷人達は何故あの様に経済力、技術力を含めた当時の国力と知識の粋を注いでまで墳墓の築造に力を注いだのであろうか。

リーダーの権威、武力を含む権力だけであの様な素晴らしい築造物を造る事が出来るだろうか。

何か当時の人たちは現代人には理解しえない自然に対する畏敬と恐れを内包する祭祀観、或いは宇宙観とでも云う思考に基づき日々の社会生活を営んでいたのではと思いますが、皆さんはどの様に思われますか。

などと思いを巡らす私を乗せてバスは一路福山に目指して走る。

今回の北房路も楽しい備陽史探訪の旅でした。次回を楽しみにして筆を置きます。

追記

この文を書きまとめながら阪神大震災のニュースを聞いています。

今度の大災害は大自然の人知を越えた悠久の営みに対する恐れを知らぬ私達現代人の驕り、傲慢、思い上がりが、この様な大災害を招いたとも言えるのではと思います。

それに比べ先人達は大自然に対して畏敬と恐れの念を持ち、自然に対してあくまでも謙虚であったのではと強く思います。

私達現代人は改めて歴史を見つめ直し、自然に対する傲慢な立居振る舞いを改め、謙虚に生きるべきだと思います。

温故知新、自戒有るのみ。

平成七年一月。

会報第64号原稿募集

四月上旬発行予定の『備陽史探訪』第64号の原稿を募集します。

歴史論文、短歌、俳句、例会参加報告、紀行文など内容は問いません。

原稿用紙に**タテ一六字で書いて下さい。**行数は本文一二〇行（タイトル・氏名四行ぶんは別扱い）でちょうど会報一頁分になります。以下三一行ごとでちょうど一段です。

二頁以内で書いて下さい。

締切りは三月一五日。送り先は備陽史探訪の会事務局宛てです。

熊野町の史跡巡り

事務局報告

福山には何もない、という言葉をよく耳にする。福山には文化がない、ともよくいわれる。ここ数十年の福山のありようを見ていると、確かにそういわれても仕方がない面があるように思う。

しかし、かつて福山は、この備南の地は、香りたつ確固とした独自の文化を持っていたのである。わたしたちは自らの「歴史」を見失っただけである。今こそわたしたちはおのれの来し方を見つめ直し、「歴史」を取り戻す必要があると思う。

徒歩例会の良さは、わたしたちの住む地域の歴史を自分の足で確かめながら学べるところにある。

奈良や京都に行けば、千年の歴史を持った建築物が数多くある。それらは確かにすばらしいし、感動もする。けれども、わたしたちの住む町の片隅にある何気ない石碑や、詣でる人もないような小さな社が語りかける囁きにも同じ感動がある。真剣に相対しさえすれば、それに秘められた「歴史」がわたしたちの心を豊かにしてくれる。大切なのは「聞く耳」なのである。

尊敬するSさんに一冊の本をいただいた。『よみがえる中世8　草戸千軒・鞆・尾道』（平凡社刊）である。Sさんは草戸千軒町遺跡の発掘に長年携わっていらした方で、この本の執筆者のお一人である。

草戸千軒の名は福山の人ならば誰でも知っている。だが、その真の価値を知っている人はそれほどいるとは思えない。かつてわたしもそうだった。むろんいまでも完全に把握しているとはいえないだろう。

が、二年ほど前に歴史に興味を持ち、少しずつ勉強するようになってから、この遺跡の凄さがわずかながらも分かったように思う。

いまわたしの中では、古代史における吉野ヶ里遺跡の価値と中世史における草戸千軒町遺跡とは同等である。いや、ある面では、この遺跡が中世考古学にもたらした成果は吉野ヶ里のそれ以上だ、といっていい。

かつて日本に中世考古学は存在しなかった。中世考古学は草戸千軒町遺跡とともに誕生し、成長していったのである。月並みないい方になってしまうが、草戸千軒町遺跡は中世考古学の金字塔である。

この遺跡に注目し、世に出した人々（浜本鶴賓、光藤珠夫、村上正名、松下正司という錚々たる人々）の感動のドラマは『日本遺跡発掘物語』（毎日新聞社刊）に詳しい。多くの人に読んでもらえればと思う。

渡辺氏の本拠はかつて草戸にあったという。そのころの草戸千軒は港町として殷賑をきわめていた。港からあがる税は決して少なくなかっただろう。渡辺氏もまた栄えていたはずである。

一六世紀前半、山内氏と木梨氏の抗争をへて、渡辺氏は山田（現熊野町）に本拠を移し、一乗山城（黒木城、七面城）を築く。今回の徒歩例会で訪れるメインである。

一二月四日（日）快晴。駅前からやって来た本隊と現地集合組と合わせて約一三〇人。当初予定していた人よりはるかに多くの人が集まった。資料が不足し、嬉しい悲鳴。熊野文化連盟や地元の方には後日お渡しすることにして急場をしのぐ。

セレモニーのあとさっそく出発。いきなりメインの一乗山城に登る。以前はカヤが伸びて容易に登れなかったらしいが、現在は登山道がよく整備されて楽である。比高も七〇mほどだろうか、さほど険しくない。

二十分ほどで本丸へ着く。郭は思ったほど大きくなかったが、土塁・堀切・横井戸・石垣などの遺構がよく残っており、まんぞくまんぞく。

山城の遺構を十分堪能して下山。日蓮宗常国寺へ行く。ここでは渡辺氏累代の墓、馬止まりの五輪塔、渡辺氏累代の座像などを拝観する。

また、特別に宝物庫を開けて下さり、日親上人自筆の曼荼羅本尊を拝見できて感激する人が多くいた。

庫裏で昼食。午後からのんびり歩いて軍端の古戦場へ。宮近門の討死した場所と伝えられる場所だが、圃状整備のためかその面影はまったくない。ただ小さな石塔が悲しげに立っているだけである。晴れてはいるものの乾いた風が時おりビューと吹き抜け、じっとしていると寒い。

少し歩いて旧往還二支路で法界碑と道標を見る。注意していなければ見落としてしまいそうである。旧道は今の感覚からするとかなり狭い。その分かれ目に二つの石像物は、まるで誰か見つけてくれよ、と祈っているかのように佇んでいた。

県道を渡って宮近門の墓と伝えられる宝篋印塔を見る。

「渡辺兼と戦って宮近門が討死にしたいう説はどうも信じられません。むしろ二者は友好関係にあったのではないでしょうか」

田口会長の結びの言葉である。

「歴史」はいつも語りかけている。

騎馬民族の墓制について

矢野　恭平

昨年八月の古墳講座で「騎馬民族は来なかった？」いうテーマで網本さんから話がありました。それは、とても興味深く、面白い話でしたが、その最中（さなか）、私はふと半世紀前のことを思い出していました。

昭和一八年、私は南満州鉄道の社員に採用され、満州に向けて旅立ちました。下関から船で釜山に渡り、そこから鉄道で京城、平城と走り、国境の鴨緑江を渡り、安東から任地である奉天（現在の遼寧省瀋陽市）に着きました。数えで一六の時です。

東を見れば、遥か彼方に山々が連なり、西を見れば、空と地の境がひとつになっています。まさに気が遠くなるような広大さです。四月の中頃でしたが、空気は肌に冷たく、ようやく、これが内蒙古の入口かという実感がわいてきました。正直これから先のことを考えると、不安が一杯で、腰が抜けるような気分になりました。

戦争に負けた時は、二度と日本に帰れないかも知れないと思いました。運よく昭和二一年に引き上げてきましたが、今思うと、よく生きて帰れたなあ、という気がします。

前置きが長くなりました。本題に入ります。

実は、満鉄在職中に、清朝第二代皇帝太宗（ホンタイジ）の陵墓（北陵）を見る機会がありました。清はいうまでもなく、北方騎馬民族の末裔で、私はその支配者（皇帝）の墓をこの目で実際に見たのです。

そこで、まず、その墓がどのようなものであったかを書くことにします。

日本の古墳と最も違うのは、陵墓を取り囲む建築物がとてつもなく壮大だということです。遺体が埋められた場所（埋葬施設）を取り囲むように方形の城壁があり、その中に生前皇帝が暮らしていた建物と同規模の建築群があります。埋葬施設はこれら建築群のほぼ中央にあります。そういっても分かりにくいので、かんたんに例えると、陵墓を取り囲むように小規模な都城が造られていると考えて下さるとよいでしょう

さて、その埋葬施設の外見はパオ（騎馬民族の仮設テント）の形をしています。こう書けば、盛り土があるように思えますが、日本の古墳と違うのは、その部分がレンガで構築されていることです。

記憶による数字なので、正確とはいえませんが、高さは四m～五m、底辺の直径は一〇mくらいだったと思います。日本古代の王墓と比較するとそれほど大きいとはいえません。

しかし、その下には巨大な地下宮殿が眠っているとされ、実際に発掘すれば、ツタンカーメンの王墓のように素晴らしい副葬品が埋納されていることは間違いないでしょう。残念な事に中身は見ることができません。ただ、その参考となる地下の埋葬施設は見たことがあります。

それはあの張作霖（注）の墓です。彼は生前から墓を造り始めましたが（いわゆる寿墓）、墓所に使われた多くの資材は、清の太祖ヌルハチの第七子饒徐敏親王の墓地から略奪してきたものです。この墓は造営途上に張作霖が爆殺されたため未完成に終わり、彼もここに埋葬されることはありませんでしたが、おかげで中に入ることができたのです。

内部は、半地下式になっており、ちょうど天上部分が地表面と同じくらいの高さでしょうか。その形状はドーム型で、高さは五mほど、底面は円形で、直径は七m～八mくらい。壁には漆喰が塗ってあり、その一部には赤い塗料で壁画が描かれかかっていました（未完）。題材は仏教の教えを図案化したものだったように思います。

そこで、私が講座に参加して思ったことですが、もし、騎馬民族が日本にやって来て、征服王朝をたてたとするならば、この清の王墓のような墓が、日本にもあってもよいのではないかということです。なぜなら墓制は最も伝統を踏襲するものといわれているからです。

しかし、私の知る限り、外見がパオと似た形状の古墳が日本で発見されたという話は聞きませんし、レンガで構築された墓が出土したという話も聞きません。

こうしてみると、騎馬民族征服王朝説にはにわかに賛成しがたい面があります。

ただ、現在、天皇陵（陵墓参考地）に治定されている大王墓が、いつの日か発掘されて、それが清王朝の、あるいは北方騎馬民族の埋葬施設と多くの共通点があるということになれば、話は全然違いますが…。

不十分な論旨だとは思いますが、素朴な疑問を思いつくままに書いてみました。

（注）中国の軍閥・奉天派の領袖。遼寧省海城県の出身、八歳で父を失い、馬賊となって頭角をあらわした。日露戦争中に日本軍と親密になるが、満州事変で日本軍に謀殺された。

近江断章（一）

平田　恵彦

司馬遼太郎の『街道をゆく』が、連載開始されたのは昭和四六年の一月一日のことでした。以来二四年、今もなおシリーズは継続しています。この大長編紀行文こそ氏のライフワークではないかと思うほどです。

その記念すべき連載第一回の舞台が、この秋一泊旅行で訪れる「楽波の志賀」なのです。それは次のような書き出しで始まります。

「近江」

というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでもう、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである。

この冒頭の一節に誘われて、いつか近江路をたどりたいと思っていましたが、昨年ようやくその念願が叶いました。そのとき考えたことなどを少し書くことにします。

近江は「歴史」の宝庫です。古代から中世、近世と、どの時代をとってみても、史跡は数え切れないほどあります。会長や末森さんならば、中世・戦国期を正面から取り上げられるのでしょうが、私はその方面が弱いので、少し観点を変えてアプローチをしてみました。

多賀大社をめぐって

所在地は滋賀県犬上郡多賀町多賀。彦根の市街地からクルマで一五分ほどのところにあります。この近辺は、第一回遣唐使の正使、犬上御田鋤の本貫の地でもあります。

祭神は伊耶那岐命・伊耶那美命の二柱。古くから縁結び・延命長寿の神様として篤い信仰が寄せられています。とくに中世に入ってからは、「お伊勢参らばお多賀へ参れ、お伊勢お多賀の子でござる」と俗謡にもうたわれ、坊人（神礼を持って全国を行脚し、御利益を宣伝する人々）の活躍によってその信仰圏は広範囲におよびました。

さて、多賀大社についての最も古い文献記録ですが、驚くべきことに『古事記』（上巻）なのです。

スサノヲが姉を求めてあまりに哭くので、イザナギが怒って「然らば汝はこの國に住むべからず」と追放した、という記事の後に「故、その伊耶那岐大神は、淡海の多賀に座すなり」との記載があります。神の鎮座した地名が『古事記』にある神社はそれほど多くなく、その意味では「大社」の名に恥じぬといえます。

ところが困ったことに、『日本書紀』（巻一第六段本文の初め）には、神としての役割をすべて果たしたイザナギが「是を以ちて幽宮を淡路の洲に構り、寂然に長に隠れましき」とあって、鎮った場所が淡路島になっているのです。古来これをめぐって論争が繰り返されてきました。

淡路島には、有名な式内社「伊弉諾神宮」がありますが、その所在地も「津名郡一宮町多賀」なのです。

これを受けて、『古事記』が写本された際に「淡路」が「淡海」と誤記されたではないか、本来は淡路が正しいのではないか、という説があるのです（荻原浅男氏など）。

確かに、イザナギ・イザナミが初めて生んだ島は淡路島であり、瀬戸内海を中心に活躍した海人（イザナギを祀っていました）とヤマト王権との繋がりもとても強いのです。

また、多賀大社は近江国一宮ではありませんし（一宮は建部大社）、『延喜式』神名帳の社格も「小社」でしかないので、この説は十分成立するように思えます。

しかし、本居宣長は『古事記伝』で、淡路島には多賀の地名は現存しない、としてこの説を退けています（青木紀元氏が補強。『古事記』では「淡路」はすべて「淡道」と書かれており、誤記ではないという説）。

これを信じる限りは、現在の淡路の「多賀」という地名は『古事記』に託つけて近世以後に成立したということになります。

私自身、詳しく調べたわけではありませんから断言はできませんが、どちらかというと宣長の方を持ちたい気がします。

ともあれ、両社とも古くから祭祀が連綿と続いている由緒ある神社です。真実はどちらであってもかまわないと思うのですが…。

多賀大社の杜の手前には「神田」があります。地名として神田（かんだ、かんた、じんでん等）が全国に多く残っているのは知っていましたが、本物の（現役の）神田を見たのは初めてです。『多賀大社その周辺』（近江文化社刊）には、御田植祭が例年六月の第二日曜日（古くは五月午日）に斎行されるとあるので、おそらくこの神事のためのものだと思います。私が友人（飯島さん）と訪れたのは四月初旬でしたが、田おこしはまだでした。神田の前には黒木鳥居があり、どことなく趣があって、やはりふつうの田んぼとは違うなという印象を受けました。

どこでもそうであるように門前に

は土産屋が並んでいます。それほど広くはありませんが、そばには駐車場もあります。休日なのに全然混んでいません。観光バスがいないときはのどかなものです。

大鳥居を越えると石製の太鼓橋があり、その先に築地塀のある立派な神門があります。これを潜ると、ほどよい広さの境内があって、正面に重層入母屋造りの拝殿が見えます。その屋根越しに外削ぎ・堅魚木五本の本殿が目に入りますが、全体は見えません。横にまわると流造りだと分かります。拝殿と本殿の間には幣殿もおかれています。豊かな社叢を背後にひかえた、実に形のいい社殿で、私はとても気に入りました。

また、境内には、瑞垣で囲われた「寿命石」があります。東大寺の俊乗坊重源が参籠のとき、笈（背負箱）を置いた石と伝えられ、これをなでると延命の願いが叶うといいます。囲いの中には多くの小石が置かれており、それには名前ともにいろいろな願いごとが書かれていました。人気があるようです。

さらに、摂社日向神社（式内社、祭神瓊瓊杵命）もなかなかよく、本当に見所の多い神社です。

ところで、この神社に伝わる古文書類は非常に多く、昭和一五年には『多賀神社文書』（文書一六巻一三六点）として刊行されました。

その中に信長の発行した禁制（財産保全の法度）があります。『多賀信仰』（多賀大社社務所刊）の写真で見ると次のようにあります。

禁制　多賀大社並町

一、当手軍勢濫妨狼籍之事

一、陣取放火之事

一、伐採竹木相懸非分課役事

右条々堅令停止訖若在犯之輩者速可處厳科者也

（判読は田口会長に頼みました）

日付は「永禄十一年八月日」とあり、末尾には「弾正忠（信長）」の署名とあの有名な朱印（天下布武）があります。

『日本史年表』（岩波書店刊）によると、永禄一一年（一五六八）七月「足利義昭（義秋）を岐阜立政寺に迎え」、同年九月には「六角氏を近江観音寺城から追い、義昭を奉じて入京」したといいますから、だいたいこのあたりの事情を反映しているのだと思います。

『信長公記』（角川古典文庫）を見ると、巻一はちょうどこの永禄一一年から始まっています。

それには、

七月二五日「濃州西庄立正寺に至って公方様御成」とあり、

八月七日「江州佐和山へ信長御出でなされ（中略）七ケ日御逗留候」

その後、九月一二日に観音寺・箕作山へ木下藤吉郎らを「かけ上させられ（中略）夜に入り、攻落し」翌一三日には「観音寺山乗取り御上り候」とあります。

これによると、信長は観音寺城をわずか一日二日で落としています。記録だけ読むと「そうか、やっぱり信長は強い」で終りですが、よく考えれば非常に不思議です。

観音寺城は中世山城として日本最大の規模を誇ります。繖山（観音寺山）の南面には数え切れないほどの曲輪があります。安土城考古博物館のジオラマでみると、その数は圧倒的（小谷城には小さいものも含めると、約一一〇〇〔誤植ではありません〕）の曲輪がありますが、それをはるかに越えるといいます。備後の山城とは桁違い）で、しかもすべて石垣で補強されています（中世山城唯一の総石垣造り）。とても短期間で落ちる城ではないのです。

秘密を解くひとつの鍵は、先の禁制にありそうです。

多賀大社の支配権は、中興の祖といわれる高頼が別当寺の不動院を開基して以来、六角氏が握っていたといいます（『多賀信仰』）。つまり、多賀大社は六角氏の身内です。織田と六角の戦となれば、当然、六角氏の方から禁制をもらうのが筋です。

一方、禁制は勝った（勝つと思われる）側からもらいます。たとえば、関ヶ原の戦いでは、戦終了の翌日から近江近在の村々の代表が、祝勝を口実に禁制をもらうため、家康の陣所へ押し寄せたといいます（『関ヶ原合戦』中公新書、二木謙一著）。

繰り返しますが、多賀大社は信長から禁制をもらっています。さらに注目すべきはその日付で「八月日」となっています。実際の戦いは九月なのに、その一月前に禁制をもらっているのです。これは既に八月の段階で、信長の勝利は間違いないと大社が確信していた、換言すると、六角氏を見限っていたことを暗示しています。その理由は何でしょうか。

ひとつは、やはり観音寺騒動以来の内紛や内訌（六角義賢と義秀の争い）でしょう。六角氏の身内であっただけに、大社はその実態をよく知っていたはずです。どんなに立派に城郭があったとしても、内部ががたがたでは用を成しません。信長に対抗するには、一族の団結がなにより大切です。それがないならば勝敗は明

らかです。

もうひとつは、もちろん、信長の実力を高く（正しく）評価した、将来性にかけたということでしょう。

この時代、身代を維持する必要上、社寺はどの勢力を頼りとするか、どこに一味するかがたいへん大きな問題でした。方向を誤ると没落してしまうからです。

たとえば、少し後になりますが、湖東三山（西明寺・金剛輪寺・百済寺、天台宗）はことごとく信長のために焼かれ、悲惨な状態に陥ります。信長が焼き討ちしたのは、なにも比叡山を憎んでいたからだけではありません。百済寺や金剛輪寺は、反信長の拠点であった鯰江城を後援したからです。延暦寺からの指令があったのかも知れませんが、見通しを誤ったというべきでしょう。時の流れに逆らわずに、山門を裏切ってでも信長につくべきでした。これに対し、多賀大社がとった道は正解でした。

では、どうやって情報を集め、正確な判断を下すことができたのでしょうか。世間の評判でしょうか。確かにそれもあったでしょう。しかし、自己の運命を左右することを単なる噂だけで決めるほど、戦国の世の人間は甘くありません。

私は坊人の存在が大きいと思います。関所の多かったこの時代でも、坊人の往来は比較的自由です。近江全域はもちろんのこと、岐阜城下にも足をのばしていたことでしょう。彼らは大社の宣伝をするだけでなく、そこで生活する人々を観察し、信長の治世を吟味し、多くの最新情報も得たはずです。こうした生きた情報を坊人たちが持ち帰り「信長強し、六角弱し」と読み切ったのではないでしょうか。それが「先物買いの禁制」になったのだと思います。

『多賀信仰』には、高野聖の諸国巡回は禁止しても多賀坊人のそれは許可した、という別の信長の朱印状も紹介されています。

多賀大社が禁制を求めてやってきた時、信長は狂喜し、勝った、と思ったに違いありません。なにしろ敵方の身内が自ら寝返って来たのですから。私は朱印状の認可はその喜びの発露だとみていますが、『古代近江物語』（国書刊行会、麻井玖美著）はより大胆に、信長が間諜として坊人を積極的に利用した、という説を提起しています。

以上みてきたとおり、要するに、信長と六角氏の戦は戦う前に勝敗が決していた、九月の戦闘は形式にすぎぬ、だからこそ一日で片がついた、といえるのではないでしょうか。

念のために書きますが、この間の詳しい事情は『信長公記』には一切出てきません。多賀大社のことも一字たりとも出てきません。ですから以下のことは、こうであったかも知れぬ、という私の夢想です。

――信長は七月二五日には岐阜にいた。義昭を奉じて進軍開始。七月終りから八月初めに彦根周辺に陣を置き、七日には佐和山城に登る。この前後、多賀大社が禁制を求めにやって来て勝利を確信する。その際、協力を申し出た坊人を利用して最新の情報を収集。外交作戦を展開して六角氏の分裂をさらに助長。戦を直前に控えて信長自身も多賀大社に参詣し、戦勝を祈願。六角氏の分裂が決定的になった後、観音寺城へと軍を進めた――。

他にも注目すべき古文書があります。豊臣秀吉の書状です。十数通残っていますが、その母・大政所の病気治癒の祈願文が特に有名です。

次のようにあります。

今度大政所煩ひ本復に於ては、壱万石奉加として申付くべく候條、祈念専一に候也。

尚以って命の儀、三ケ年、然らずんば二年、實々ならずんば三十日にても延命候様に頼み思し召され候。

病気が治癒すれば、なんと一万石を寄進するというのです。

実際その後、大政所の病状は小康を得たので、秀吉は一万石を奉納しています。これは、堺港まで米を受け取りに来るように、との催促状も残っているので確実に証明できるといいます（『多賀信仰』）。

秀吉の本拠、尾張には「熱田神宮」「津島天王社」という全国的に著名な二つの神社があります。にもかかわらず、多賀神社に願かけしたというのは「延命長寿の神様」というだけでは説明がつかない何か深いわけがあるように思えます。とにかく、一万石というのはただごとではありません。ひょっとすると、六角氏征伐の藤吉郎時代、多賀大社や坊人に対して何か恩義を感じることがあったのかも知れぬ、と一人勝手に想像を膨らませています。

さらに『多賀神社文書』の中には鎌倉幕府御教書、佐々木道誉書状、足利尊氏御教書、武田信玄祈願文、六角義賢書状、徳川家康書状など、中世史ファンには涎が出そうなものばかりあります。

多賀大社は社寺が好きな方、戦国時代に興味のある方ともに満足できると思います。一泊旅行のコースに入るかどうか気になるところです。

信義

岡本　信子

闇の中に老梅の香が玲瓏と漂う今宵、一枚のはがきを受取った。

それはつい一ケ月程前、福山住吉スクエアーで丹波焼の大皿を買い求めた時、糸底に〝正〟と刻み込まれてあり、発売元の挨拶状が添えられてあったのを頼りに、この器の作家のご住所をお尋ねした、そのご返事なのであった。

初めてこの器を手に持ったとき、その釉薬のたっぷりが、ところどころで溜ったり、一気に刷いた刷毛の跡が躍動していて、その上器の縁の撓み具合の余韻の楽しさ。

投函以来日が過ぎる程に、この多忙な時代にこちらのお願いが無理だったのだろうと、諦めかけていた矢先、

「手前共の取扱いました商品をお買上げ頂き、誠に光栄に存じます。実は弊店では、昨年六月に廃業致しました為、郵便物の廻送が送れて昨日手許に届きました次第、ご返事が延引致しお許し下さい。

〝正〟と銘打ってあれば、それは確か丹波立抗焼の○○先生の作品と思います。ご住所は云々。尚只今手前共は表記の所に居住しておりますので、疑問の点はお申越下され度」

とあった。

思いも染めずさわやかな文を手に、空を仰ぐと月は高きにあり、凛々しい夜事の寒気は一層きびしく、昔ながらの信義の心に出会って身の締まる思いであった。

老梅の香は馥郁と立ち籠めている。

平成七年度総会開催

阪神大震災被災者に義捐金おくる

一月二九日（日）遺族会館で、平成七年度備陽史探訪の会総会が開催されました。

これに先立ち、記念歴史講演会が午後一時半から行われ、五二名が参加しました。

講師は間壁葭子先生（神戸女子大学教授・倉敷考古館学芸員）で、演題は「古墳の再利用」でした。

当日は冬型の気圧配置。外は厳寒でしたが、会場は熱気にあふれていました。会員の真剣な態度を感じ取って下さり、お風邪を召していらしたにもかかわらず、先生は熱弁を振るって下さいました。

講演終了後、三時半から六一名が参加し、総会が開かれました。

冒頭、田口会長は「いよいよ今年は創立十五周年。昨年の広島文化賞受賞に恥じることのないよう、活動をさらに活発化し、郷土に貢献していきたい。また、五月の記念行事を大成功させるよう、ともどもに頑張ってまいりましょう」と挨拶し、次いで満場一致で柿本光明氏を議長に選出しました。

初めに議長の主導で、阪神大震災で亡くなられた方のご冥福を祈って黙祷を捧げ、議事に移りました。

まず、事務局、各部会から決算報告、活動報告があり了承されました。次に今年度活動計画と予算案が提出され、承認されました。

活動報告、活動計画、決算報告、本年度予算等は次ページから掲載しますのでそちらを参照して下さい。

最後に議長より、阪神大震災で被災された方々に対し、義捐金として三万円を贈ることが提案され、満場一致で承認されました。

引き続き五時より新年宴会が開催され、五四名が参加しました。和やかな雰囲気の中、親睦を深め、会の発展を誓いあいました。

なお、新年宴会の開会が急遽予定より三〇分繰り上げられたため一部の方にはご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫びいたします。

第二回郷土史講座

巨大古墳の謎を探る

―三ツ城古墳を中心として―

三世紀末に突如出現した箸墓古墳（前方後円墳）は、以前の弥生時代の古墳（墳丘墓）とは隔絶した大きさをもっていました。前方後円墳時代（近藤義郎）の幕開けです。

五世紀に入ると、古墳はさらに大型化し、最盛期を迎えます。畿内だけでなく、全国各地に巨大古墳が造営されるのです。備後にも辰ノ口古墳（神石町）や天王山古墳（東城町）が築造されます。このため五世紀を「巨大古墳の世紀」と定義する考古学者（森浩一）もいるほどです。

なぜこれほどまで大きな古墳が造られたのか、その意味するところはいったい何か。

今回は、県内最大の三ツ城古墳に焦点をあてながら、網本さんにこの問題についてお話しいただきます。

＜実施要項＞

日程　二月二五日（土）

時間　午後一時三〇分～四時

会場　市民会館会議室（中央公民館ではありません）

講師　網本善光（古墳部会副部会長）

費用　資料代として一〇〇円

平成6年度 活動報告

① 例会（含総会、1泊旅行、親と子の古墳巡り、忘年会）

月日	行事	担当／講師	場所	参加数
1／23	総会		福山城・湯殿	40名
2／6	バス例会　古代吉備王国探訪	七森　義人 平田　恵彦	吉備路	84名
3／6	バス例会　平賀氏の史跡巡り	末森　清司	東広島	55名
5／5	第12回親と子の古墳巡り	山口・網本 篠原	神辺町	約130名
6／5	バス例会　水無月の津山を味わう旅	立石　定夫	津山	53名
9／11	バス例会　吉備の古代祭祀を探る旅	神谷　和孝 平田　恵彦	吉備路	57名
10／9・10	1泊旅行　神在月に遥かなる古代のロマンを求めて	旅行委員	伯耆・出雲	45名
10／29	「広島文化賞」受賞記念祝賀会	役員会	福山ワシントンホテル	63名
11／13	秋の古墳巡り　晩秋の北房町を歩く	山口　哲晶 網本　善光	北房町	43名
12／4	福山市熊野町の史跡巡り（徒歩例会）	田口　義之 黒木日出人	熊野町	約130名
12／7	忘年会	事務局	サンピア福山	44名

② 郷土史講座・シンポジウム

月日	講座名	担当／講師	会場	参加数
1／23	総会記念歴史講座　朴斎・鰐水・朗盧	園尾　裕	福山城・湯殿	40名
3／5	特別郷土史講座　義倉創立の志	立石　定夫	義倉会議室	25名
4／23	第3回郷土史講座　福山の古墳	網本　善光	中央公民館	17名
5／28	第4回郷土史講座　悪党について	出内　博都	市民会館	21名
6／25	第5回郷土史講座　古代の祭式と須恵器	山口　哲晶	中央公民館	23名
7／9	第6回郷土史講座　スサノヲと蘇民将来伝説	平田　恵彦	中央公民館	33名
8／7	歴史シンポジウム　応仁の乱	田口・出内 杉原・小林	市民会館	30名
9／24	第7回郷土史講座　古事記成立の意義と背景	神谷　和孝	中央公民館	31名
10／22	第8回郷土史講座　わが家のルーツ調べ	杉原　道彦	中央公民館	33名
11／26	第9回郷土史講座　群雄流転 ―人物で綴る備後戦国史―	田口　義之	市民会館	37名
12／17	特別郷土史講座　最近の県内の発掘成果について	篠原　芳秀	サンピア福山	40名

③ 定期講座・特別講座

月日	講座名		担当／講師	会場	参加数
6／18	ふるさとの小祠の祭り	歴史民俗研究部会	石井　良枝	中央公民館	29名
毎月第1土曜日	『古墳講座』	古墳研究部会	網本　善光	中央公民館	／
毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究部会	神谷・平田	中央公民館	／
毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究部会	出内　博都	中央公民館	／

城郭研究部会活動報告

①**月例研究会「中世を読む会」**
『備後古城記』を読む。第三土曜日午後七時開催。毎回約二〇名が参加。

②**郷土史講座担当**
☆「悪党について」出内博都
五月二八日（土）二一名参加
☆「わが家のルーツ調べ」杉原道彦
一〇月二二日（土）三三名参加
①②とも中央公民館で開催。

③**『山城探訪』発行の測量調査**
一月一六日の「丸山城」「矢繰城」を手始めに四月一七日まで毎週日曜日（祝日）以下の山城を調査した。
「青ケ城」「阿草城」「近江城」「殿奥城」「赤柴城」「渕上城」「石屋原城」「折敷山城」「陶山城」「的場山城」「銀山城」「芋原の大スキ」「戸屋ガ丸城」
一一月から一二月にかけての調査。
「大場山城」「鷲尾山城」「陶山関係山城」「戸屋ガ丸城」「的場山城」「掛迫城」毎回一〇名前後が参加。

④**徒歩例会「熊野町の史跡巡り」**
一二月四日（日）実施。
講師　田口義之、黒木日出人
約一三〇名が参加し、大盛況。

⑤**山陰一泊旅行**
一〇月一〇日、一一日（日・祝）
「大山寺」「三刀屋氏と三刀屋城」

古墳研究部会活動報告

①5／5　第12回「親と子の古墳巡り」担当。神辺の古墳をまわる。
参加約一三〇名。

②郷土史講座担当。第三回（4／23）
「福山の古墳」網本善光
第五回（6／18）「古代の祭式と須恵器」山口哲晶

③11／20　第六回「秋の古墳巡り」担当。北房町の古墳巡り。

④毎月第一土曜日に「古墳講座」を実施　網本・山口　中央公民館

⑤『山城探訪』の発行共同測量調査。

歴史民俗研究部会活動報告

①6／30（土）特別講座「ふるさとの小祠の祭り」講師　石井良枝。
参加二九名。

②郷土史講座担当　中央公民館
第六回（7／9）「スサノヲと蘇民将来伝説」講師　平田恵彦
参加三三名。
第七回（9／24）「古事記成立の意義と背景」講師　神谷和孝
参加三一名。

③9／11　バス例会「吉備の古代祭祀を探る旅」講師　神谷・平田

④毎月第二土曜日『古事記』を読む。
座長　神谷・平田　中央公民館

⑤『山城探訪』の発行共同測量調査。

今年度部会・事務局計画

城郭研究部会活動計画

①創立一五周年記念『山城探訪』出版。研究調査、および執筆。

②「中世を読む会」引き続き『備後古城記』を研究する。
毎月第三土曜日午後七時、原則として中央公民館。次は二月一八日。

③山城探訪（赤松氏の「白旗城」）
史跡探訪（バス徒歩例会担当）

④郷土史講座第七回（八月）第一〇回（一一月）担当。前記の通り。

古墳研究部会活動計画

①第一三回「親と子の古墳巡り」を五月五日（祝・木）に実施する。
今年は「神辺・加茂コース」

②第七回「秋の古墳巡り」を一一月一二日（日）に実施。
海を越えて「石清尾山」へ。

③第二回（二月）と第九回（一〇月）の郷土史講座担当。

④引き続き「古墳講座」。
毎月第一土曜日午後七時。中央公民館。次は二月四日。

＊今年は応用編。博物館見学や実際に古墳を探訪しての実地学習も計画。

⑤神辺町・加茂町の古墳の分布調査を検討中。詳細未定。

歴史民俗研究部会活動計画

①「『古事記』を読む」を継続。毎月第二土曜午後二時。中央公民館。
「最大」は達成できたので、今年は「最強」を目指す。

②第五回（五月）と第九回（九月）の郷土史講座担当。講座内容前記の通り。

③六月一一日（日）のバス例会担当。
「古代吉備不思議旅」あの熊山遺跡を探訪。

④ほかに石像物分布調査を考慮中。

今年度会報等発送計画

2／11（土・祝）
会報63号と『山城志』12集
3／18（土）行事案内
4／8（土）会報64号
5／6（土）行事案内
6／17（土）会報創立15周年記念号
7／8（土）行事案内
8／5（土）会報66号
9／16（土）行事案内
10／28（土）会報67号
11／18（土）『山城志』13集と案内。
12／2（土）会報68号

☆以上はあくまでも計画です。都合により変更される場合があります。おおよその目安とお考え下さい。

平成7年度 活動計画

郷土史講座・シンポジウム・講演会

1／29（日）	特別郷土史講座 『古墳の再利用』	間壁 葭子	遺族会館
2／25（土）	第2回郷土史講座 『巨大古墳の謎を探る ―三ツ塚古墳を中心として―』	網本 善光	市民会館
3／25（土）	第3回郷土史講座 『備後国太田荘を巡る闘い 平重衡から上原元将まで』	田口 義之	中央公民館
4／22（土）	第4回郷土史講座 『文献から見た古代の戦い』	七森 義人	中央公民館
5／20（土）	第5回郷土史講座 『万葉と瀬戸の旅人』	平田 恵彦	中央公民館
5／27（土）	創立15周年記念講演会	中井 均	
6／24（土）	第6回郷土史講座 『福山の寺院建築 (or 福山の仏教美術』	川崎 雅博	中央公民館
7／22（土）	第7回郷土史講座 『戦国武将入江氏について』	杉原 道彦	中央公民館
8／ 6（日）	シンポジウム 『暴れん坊将軍の実像に迫る』	市民会館	（中央公民館）
9／30（土）	第8回郷土史講座 『題未定』	神谷 和孝	中央公民館
10／28（土）	第9回郷土史講座 『積石塚の謎を探る』	山口 哲晶	中央公民館
11／25（土）	第10回郷土史講座 『地名が語る郷土の歴史』	出内 博都	中央公民館
12／16（土）	特別郷土史講座 未 定		

バス・徒歩例会・古墳巡り・1泊旅行

3／19（日）	バス例会 『憧れの白旗城に挑戦する―赤松氏の史跡巡り―』	七森・杉原
4／16（日）	バス例会 『中世太田荘の残像―今高野山に春霞たなびく―』	田 口
5／ 5（金祝）	第13回親と子の古墳巡り 『神辺町～加茂町を歩こう』	山口・網本・篠原
6／11（日）	バス例会 『古代吉備不思議旅―熊山遺跡を中心として―』	種本・平田
7／16（日）	バス例会 『ある晴れた日の勝山は森の中にたたずむ』	神谷・平田
9／17（日）	徒歩例会 『木之庄町・本庄町の史跡巡り ―ささやかなプレゼントをあなたに―』	中村・出内
10／14・15（土日）	1泊旅行 『秋天に戦国の残光を求めて―近江・越前の旅―』	旅行委員
11／12（日）	秋の古墳巡り『積石塚の謎を解く―石清尾山古墳群を中心として―』	山口・網本
12／ 3（日）	徒歩例会 『蔵王町の史跡巡り―幻の古代深津市を探る―』	田口・柿本

定期講座

① 毎月第1土曜日	『古墳講座』	古墳研究部会	山口・網本	中央公民館
② 毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究部会	神谷・平田	中央公民館
③ 毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究部会	出内 博都	中央公民館

平成6年度 支出入決算報告

勘定項目	収入額	摘要	勘定項目	支出額	摘要
会費	577,500	206名	印刷費	466,195	『山城志』等
	内訳		通信費	238,274	切手代等
	3,000×172=516,000		事務費	70,040	封筒・ラベル等
	1,500×3=4,500		備品費	14,317	テープレコーダー
	1,000×5=5,000		講師謝礼	30,000	講演会・講座・例会
	4,000×13=52,000		諸会費	21,000	文連・県史協
雑収入	667,532	書籍販売等	広告費	10,300	福山リビング
銀行利息	10,451		雑費	8,956	振替料等
繰越金	67,977		山城調査費	67,913	地図・器具等
✡広島文化賞賞金	500,000		繰越金	896,465	
総計	1,823,460		総計	1,823,460	

監査の結果、上記の通り相違ないことを承認します。

監査委員　藤井忠夫、杉原外志子㊞

総会において下記の通り承認されました。

平成7年度 支出入予算

収入の部			支出の部	
項目	予算額	摘要	項目	予算額
会費収入	660,000	3,000円×200人	『山城探訪』出版費	900,000
		4,000円×15組	『山城志』印刷費	300,000
雑収入	550,000		会報『備陽史探訪』印刷費	180,000
繰越金	896,465		行事案内印刷費	20,000
			郵送・通信費	280,000
			城郭研究部会活動費	30,000
			古墳研究部会活動費	30,000
			歴史研究部会活動費	30,000
			記念行事費用（講演料等）	200,000
			一般経発・雑費	100,000
			予備費	36,465
総計	2,106,465		総計	2,106,465

新入会員紹介

前号のあと次の方々が入会されましたのでご紹介します。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

一一月五日（土）第八回古墳講座。「四国の古墳総めくり」参加一七名。積石塚の謎について勉強する。

一一月一二日（土）第二回『古事記』を読む。参加二六名。視聴覚室に入り切れないほどの大盛況。次回から会議室に変更することにする。

一一月一三日（日）古墳部会担当 秋の古墳巡り「晩秋の北房町を歩く」参加四三名。講師 網本善光。大谷一号墳に感嘆の声が上がる。

一一月一九日（土）第九回『備後古城記』を読む。参加一六名。高いレベルの話が飛び交う。

一一月二〇日（日）山城調査。大場山城。ブッシュが酷く苦労する。女性の新人登場。参加七名。

一一月二六日（土）第九回郷土史講座「群雄流転 人物で綴る備後戦国史」講師 田口義之 参加三七名。会場は市民会館第一会議室。講演をビデオで録画する方も。

一一月二七日（日）山城調査。鷲尾山城。急峻な山城で、大汗をかいて登る。城域が広く、調査に時間がかかる。参加一四名。

一二月三日（土）第九回古墳講座。「天皇陵古墳を考える」参加一五名。考古学会に参加した網本さんから最新情報が。

一二月四日（日）徒歩例会「熊野町の史跡巡り」講師 田口義之、黒木日出人。参加約一三〇名。資料が足らなくなり、地元参加の方にご迷惑をおかけした。

一二月一〇日（土）第三回『古事記』を読む。参加者が急増し三一名。本文冒頭三行を集中学習。

一二月一一日（日）山城調査。的場山城、掛迫城。そぼふる小雨のなか六名が参加。中国新聞の三藤氏が取材に来る。もっと多い時に来て欲しかった。

一二月一七日（土）
①役員会参加八名。平成七年度総会の打ち合わせ。
②特別郷土史講座「最近の県内の発掘調査について」講師 篠原芳秀。資料満載、篠原先生はスライドを使っての大熱弁。参加四〇名。
③忘年会参加四四名。杉原外志子さんの手品の妙技に大拍手。会場はいずれもサンピア福山。

一二月一八日（日）山城調査。陶山氏関係城（笠岡城）参加八名。亡年会の二日酔いにもめげず、頑張って参加された人はエライ！

一月七日（土）第一〇回古墳講座。「94重要発掘調査総まくり」三内丸山遺跡のビデオを見ながら勉強する。参加一五名。行事案内発送。

一月八日（日）白旗城下見。参加四名。細野ルートは例会には無理と判断。野桑ルートにする。

一月一四日（土）第四回『古事記』を読む－参加二三名。『古事記』の中空構造について学習。

一月二一日（土）第一〇回『備後古城記を読む』参加一四名。

一月二九日（日）
①午前一一時三〇分 役員会開催 今後の打ち合わせ。参加一〇名。
②総会記念講演会「古墳の再利用」講師 間壁葭子先生 参加五二名。
③総会開催。参加六一名。新年度予算・活動計画等承認。
④新年宴会 参加五四名。いつもの盛り上がりで大盛況。会場はすべて遺族会館で行われた。

✡講座等の会場は、特にことわりのない場合すべて中央公民館。

憧れの白旗城に挑戦する

ー本年度第一回バス例会ー

城郭研究部会担当の「赤松氏の史跡巡り」です。

赤松氏隆盛の基礎を築いた円心とその居城白旗城はあまりにも有名です。ここに立て籠もり、尊氏追討の新田義貞の進撃を阻んで、尊氏再起の時間を稼いだ円心の功績は甚大でした。この功により、地方豪族の出身でありながら、赤松氏は四摂家に列する栄誉を受けます。

白旗城に登るのは確かに大変ですが、頂上の広大な郭を見れば、疲れはいっぺんにふっ飛びます。

探訪コースについての詳細は杉原さんの下見レポートをご覧下さい。

なお雨天の場合、山城登山は危険なためコースを変更して実施いたします。ご了承下さい。

＜実　施　要　項＞

日程　三月一六日（日）雨天決行。
集合時刻　午前七時四五分
集合場所　福山駅北口「福山キャッスルホテル」前
参加費用　会員　四二〇〇円
一般　四五〇〇円
申込み開始日　二月一三日（月）
その他　弁当・飲み物持参。山歩きの出来る格好で参加の事。

第12回古墳講座

第12回古墳講座は「備後の原始・古代を探る（下）」と題して郷土の古代史の謎に迫ります。今回は古墳時代の遺跡を中心に取り上げます。

四月からは装いも新たに古墳講座発展編が始まります。お楽しみに！

＜実　施　要　項＞

日時　三月四日（土）午後七時から。
場所　中央公民館二F視聴覚室
資料代　一〇〇円
講師　山口哲晶（部会長）
網本善光（副部会長）

『山城志』第13集原稿募集

今年一一月発行予定の『山城志』第13集の原稿を募集します。

内容は日本史・郷土史に取材した論文、論考、随筆、紀行文、小説などです。

枚数は、四〇〇字詰原稿用紙にタテ書きで三〇枚以内（ワープロ原稿は一行字数を三二字に設定して下さい）です。

原稿締切りは五月末日ですが、予定した量の原稿が集まらなかった場合には、随時締切り日を繰り下げます。原稿の送り先は備陽史探訪の会事務局です。

平成七年度役員紹介

名誉会長　神谷和孝
会長　田口義之
副会長　山口哲晶、中村勤史
馬屋原亨
参与　中西晃、末森清司・後藤匡史
佐藤洋一、種本実、棗田英夫
（事務局）
事務局長　七森義人
局員　佐藤秀子〔会計担当〕
金永真澄、佐藤錦士、井上良三
平田恵彦〔会計担当〕
（歴史民俗研究部会）
部会長　神谷和孝　副　平田恵彦
（古墳研究部会）
部会長　山口哲晶　副　網本善光
（城郭研究部会）
部会長　出内博都　副　杉原道彦
★会計監査委員
藤井忠夫、杉原外志子

平成七年度会費納入について

今年度会費をまだ納入されていない方は、同封の郵便為替をご利用いただき、今月中にご納入下さい。あるいは会の行事の際、ご持参いただいても結構です。

年会費は個人会員三〇〇〇円、夫婦・親子会員四〇〇〇円です。

もし、今月中に納入されない場合には退会されたものといたします。

☆前回お送りした振込み用紙の一部に不備がありました。金額欄に誤って振込み番号が記入されていました。申し訳ありませんでした。

編集後記

一月一七日早朝、強い揺れに目を覚まし、飛び起きる。すぐにテレビをつけ衛星放送にすると、しばらくして地震速報が始まった。

大阪、京都が震度5。福山でも震度4。神戸、洲本はすぐには表示されずに二〇分ほどして震度6の表示が出る。

兵庫県南部地震から阪神大震災と名称が変わり、震度も7へ。時をおうごとに増える被害に暗澹たる気持ちになる。そしてついに死者五千人を越える戦後最悪の大惨事に。

一五日（成人の日）編集子は神戸の夜景を見ていた。わずか二日たらずの差、人ごととは思えなかった。

震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災者の方々に衷心よりお見舞い申し上げます。

備陽史探訪の会事務局
〒七二〇　TEL（五三）六一五七
福山市多治米町五ー一九ー八